

空から考えたこと

(有)アルゴ地域総研 代表取締役

小 椋 護



空に雲がわきおこり、地には緑がもえ盛る

昨年の夏、空を飛んでみたいと思い札幌近郊の山に出かけた。仕事仲間に紹介してもらったパラグライダースクールを訪ねたのだ。

スクール入校初日は、キャノピー（翼）の立ち上げから始まった。パラグライダーは、落下傘を何本ものひもで引っぱって、傘を膨らまし山から飛びながら降りてくるというもの。傘の部分が飛行機の翼であり、引っぱるひもが操縦桿である。

風向きに対して正対する方向から少しでもずれて走ればキャノピーは広がってくれない。「ラインは大丈夫か」インストラクターが基本的な準備作業の確認を促す。「オーケー、そのまま、こっちへ走って来い」「だめだめ、脇が開いたまま走ってもだめだよ。脇はしっかり閉じて」一度立ち上げに失敗したら、キャノピーを地面で開いてラインを確認し、ラインを握り閉めるまで全てを一からやり直す。

3回、4回と繰り返すうちに要領がわかってくる。その頃には肩の筋肉と首筋が少し疲れてくる。「大丈夫かい」「大丈夫です」「じゃあ、もう一本行くか」

その日は、キャノピーを頭の上まで立ち上げるころまではこぎつけた。

2日目は、頭の上に立ち上げた落下傘をそのまま走りながらラインで引っぱり、自分のからだごと浮き上がらせる練習である。そして3日目 came。

「今日は斜面の下まで走りきってみよう」との指示。キャノピーオーケー、ラインオーケー、握りオーケー。「さあ、今だ。そのまま真直ぐ走って…」インストラクターの力強いゴーサイン。走っ

てすぐに風をためたキャノピーが体を引っばる。前に走ろうとしても風の重さで走れない。キャノピーが頭の上まで立ち上がると急に体が軽くなり、そのまま一気に斜面を駆け降りた。

オーケー、逆らわずに万歳する。握りを離して。一瞬、一瞬の動作をインストラクターが拡声器で指示してくる。

10歩も走っただろうか、そのまま体が地面から離れた。離陸の瞬間だ。感動している間もなく、グライダーは風をはらんだままぐんぐん上昇していく。インストラクターや練習仲間が見る見る小さくなっていく。視線を下から前に移すと札幌の市街地が一面に広がった。

「ブレイクコードをゆっくり引け！」インストラクターの声が風にかすれて聞こえない。誰かがなにやら絶叫していることだけはわかった。一方、私は空を飛んだ初めての浮遊感を一瞬楽しんでいった。気づいたとき、グライダーは斜面の下限を超えようとしていた。着陸しなければ住宅街か林の中に突っ込むしかない。右のブレイクコードを引け！かすかに聞こえてきたインストラクターの指示に従った。しかし、引っぱる力の微妙な加減がまだ会得できていない。強く引きすぎてしまった。グライダーは右に急旋回しながら急降下した。地面が一瞬にして自分に迫ってきた。自分の体をかばって着いた右手の手首が非常に強い衝撃を受けて、そのまま尻餅をついて着陸した。

結果の責任は全て自分が負う！

私は手首を打撲捻挫し、1ヶ月近く湿布をはず

せなかった。その間、私は教官が私のところにやってきて、調子に乗るな、死にたいのか！と絶叫していたことを静かに頭の中で反芻していた。

パラグライダーは簡単に飛べるんだという予備知識が自分の体の中で、いつの間にかどんなことがあっても安全なんだという誤った知識になっていたことを身をもって知らされた。

スカイスportsほど、ちょっとしたミスや不注意が最悪の結果を招くSportsは他にない。初心者にとって離陸はたまたまの結果であり、高く飛べたのもたまたまの結果であった。そしてハードランディングだけが当然の結果であった。プロセス一つ一つを自分が完全に会得しなければスカイスportsを楽しむことはできない。そして、起こった結果は全て自分が責任を取るのだ。

空を飛びながら、現代の複雑な情報化社会や不安定な経済社会について考えた。

もっと主体的に社会に向き合って行動していけば、その結果全てに責任は我にありと潔く応えられるのではないかと。

情報化社会に向き合う

現代社会は多くが仮想の情報で成り立っている。北朝鮮の金正日氏に会って話した人は数少ない。一方で誰もが金正日氏をこういう男だと思っているところがある。昨年のノーベル賞受賞者の田中氏に対してもそうである。情報化社会では直接触れることのできない事物や事象が何らかのメディアを通して情報として流される。その情報は膨大な量である。その大部分は生きていく上で必要でもない2次的、3次的な垂れ流し情報である。一人の人間が情報の大波の中でどれがどの程度正しいとか、どのくらい曲げられて伝えられているかなど判断できる余地は少ない。

情報の波に正しく向き合う方法は、唯一事物や事象を自分の目や耳で確かめ、自ら体験をし、経験を重ねることだ。情報の質や性格を瞬時に判断していく力や感性を養っていくしかない。

そして、社会に向き合う姿勢が主体的であればあるほど、不必要な情報に振り回されることなく、し

かも必要な情報は向こうからやってくるのである。

将来を切り開く意志を持たねば…

日本では平和な時代が何十年も続いてきた。それがたまたまそうだったのか。それとも日本人一人一人が努力したからそうなったのか明確に答えることができる人は少ないと思う。我々が生きている短い歴史でさえも自分や人々の考え方や意思とその歴史との因果関係を結論付けることができないことがいかに多いことか。

過去のことさえそうなのに、将来については尚更不確実である。だからと言って将来は誰にも読めないという言い方ほど情けないものはない。その言い方には、将来を切り開いていく力や意志が微塵も感じられないからである。将来を読むことは将来を切り開く意志や意識が根拠になっていることをもっと認識すべきかもしれない。それが希薄であるために将来を読むことができなくなっていることが最も問題なのだと思う。自分と将来の因果関係について自分の意志や能力に自信をもてなくなり、敢えて努力もしようとしないということか。将来をこうする、こうできるという意志や意識を個々人が持ち、社会がそれを力として感じ取れるようになれば、社会は100%その通りにならなくてもその方向に一步でも近づいていくことができる。

日本経済が失われた10年と言われて久しい。もともとは巨額の対外債務を抱えて財政破綻に悩んだラテンアメリカの80年代のことをそう呼んでいた。日本の場合は90年代のことだけではなく、21世紀に入って10年後には失われた20年になり、20年後には失われた30年になる。将来こうするという強い意志を働かすことができれば。

昨年が開発こうほうの新春座談会に「一人称で自分は北海道をこうすると一人一人が語り行動しなければ、北海道はいつまでたっても変わらないし、変えることはできない」という趣旨のお話が掲載されていたことを思い出した。

そう、今年こそは、自分の意志を強く持ち続けていたいと思う。

■プロフィール■

小椋 護

1958年愛媛県生まれ。札幌市在住。1982年東京農工大学農学科卒業。9年間の役所勤めのあと、1991年(株)シグマ開発計画研究所札幌事務所勤務を経て、1996年有限会社アールゴ地域総研を設立。地域計画の業務に携わっている。